

## (II)

この集会の模様を具体的に説明しよう。場所は九州で最も大きい県である福岡の、県庁所在地福岡市だ。海水浴場としては都心に近いので汚れて評判が悪いが、便利というそれだけの理由で、夏を迎えるとすごく混雑する。百道(ももじ) 海水浴場の百道屋という。満潮になれば軒下が潮に洗われるほど浜近くに建てられた脱衣場である。多くの客を収容するだけあって、二階建の、バラックにしては頑丈に出来ていた。気にいったのは、この会場が、三つに分断されていることだ。別の言葉でいえば会場としては非常に不都合ということ、例えば、一つの集会が三つに別れるということ自体が無理なのだが、そんな不便なところが、非常に気にいったのである。

歴史的に戦闘的運動であった「未来派」が「美術館を燃やせ」と叫んでから、すでに久しいが、オリジナル原画一点というタブローの持つ宿命的悲しさ故、画家はタブローの生活にしばられ、いまだに絵画という美名のために、美術館を捨て去ることが出来ず、その狭い範囲において生計の道をたてなければならないのだ。

すべての権威を否定しなくては別の生き方は出来ないと判っていても、画家自身が壁面から、それにもまして画商から離れることが出来ないのが、現代絵画の悲しい生活の状況だが、この会場に関する限り、それ等とは、いっさい絶縁して始められた集会なので、普通の会場とは程遠い、能力の適用、あるいは生命力の試験みたいな結果になった。

事実、夜七時「開会の挨拶」とも、「注意事項」ともつかない開会の辞が始まり、はなはだ曖昧な司会のうちに、各々が、各々の地点で各々のことを行動しはじめ、三つの部分を、悪意のもとに阻止して他人の動作を否定するもの、極めてわずかな時間を行動して、あとはキビシイ、イジの悪い観客となって監視するもの、すべてが勝手に行動することによって集会は進められていった。その結果が他人を規定し、他人が定規みたいな基準となり、トックリビンの狭い口となって他人に興味のない人はさっさと帰り、また見物人のいない一人芝居さえもが、朝の七時まで延々とつづけられる結果となった。